

## Social Type としての「英雄」像

### —価値意識研究に向けて

市川 孝一

本稿の目的は、価値観・価値意識の研究の1つの手がかりとして、“英雄像”を社会心理学的な視点から検討する際の、おおまかな方向づけ・基本的枠組の一例を示し、それにもとづいて行なっている調査の結果の一部を報告することである。

#### <“英雄”研究の意義>

英雄とは何か？——という問いが、どの時期にまでさかのぼれるかは、明らかではないが、英雄を対象とした自覚的研究としては、カーライルのものなどが、古典的なものとしてよく知られている。ここでの議論は、いわゆる「英雄論」<sup>(1)</sup>「英雄崇拜論」であるが、“英雄たちの時代”が去った後で、その不在を嘆きつつ、英雄について語られたのが、おそらくそのはじまりであろう。

このような時期を経て、英雄が本来の意味で、その学問の対象とされるようになったのは、19世紀の終りから20世紀初頭にかけての、いわゆる批判的・科学的歴史観の成立、あるいは、社会学・人類学の発達を待ってからだったといわれる。<sup>(2)</sup>

こうした、いわば英雄研究の系譜をたどることも1つの重要な課題となり得るが、ここでは、それは目的ではなく、詳細にふれることはしない。<sup>(3)</sup>本稿では、英雄の“社会学”的研究の比較的新しいものである Orrin E. Klapp の研究に、主に依拠しつつ、英雄研究の1つの可能性を示してみたい。

その前に、まず英雄とは何か？——という問いに対する現段階での“コンセンサス”＝英雄研究の前提となる英雄のとらえ方についての一一致した見解を一応おさえておきたい。

いうまでもなく、英雄とは、辞書の定義によれば、“すぐれた才知・実力を持ち、非凡な事業をなしとげる人”ということになるが、もう1つ欠くことのできない重要な条件がある。それはそういう人間として、他の多くの人々に認められていることである。彼の勇氣、高潔さ、功績が、人々によって賞賛されなければならないのである。——さらに、これを極言するなら、ある人間の持っているすぐれた資質が、民衆・大衆によって神格化され、伝説化され、虚構化のプロセスを経たときに、一人の“英雄”が誕生するのである。英雄、あるいは英雄像は、民衆・大衆の願望の反映であり、彼らの夢や希望を人格的に形象化したものであるという“通説”は、この条件を基礎としたものである。

さらに、もう1つ、今度は、やや視点を変えて、より“社会学的”な言いまわしによるコンセンサスをあげておこう。それは簡単に言ってしまうえば、英雄というものは、ある特定の文化あるいは、社会集団の中で望ましいと思われるもの、すなわち理想的価値や規範の体现者であるということである。

我々は、このコンセンサスに注目したい。何故なら、この前提を受け入れるなら、逆に、我々は、英雄あるいは英雄像を検討することによって、その社会が成員の間で最も高い価値を与えているもの＝理想的価値——さらには、もっと一般的に、価値観、価値指向、価値システムの一側面——を明らかにすることができるからである。この点こそが、英雄研究の基礎であり、出発点であり、かつまた、我々を英雄研究の主要な、そして最大の意義へ導くポイントでもある。何故なら、英雄の検討は、最終的には、価値観を軸とした、比較社会的あるいは比較文化的な研究の可能性を開くものだからである。

### <Orrin E. Klapp の英雄研究>

O・クラップの英雄についての研究は、上記の第2のコンセンサスの立場に立つものであるといえよう。彼は、その著書、*Heroes, Villians and Fools* (1962)<sup>(4)</sup>において、英雄を社会的タイプ (Social type)<sup>(5)</sup> との関連で1つの役割モデル (role-model) としてとらえている。

クラップによると、英雄、悪漢、阿呆は、どの社会においても、集団の成員

や、ある地位を占めている者に対して適用される規範との関係で、

- (a) それより優っている (better than....)
- (b) それにとって危険である (dangerous to....)
- (c) それに達しない (falling short of....)

という3つの方向を表わすものだと言われる。また、これらの基本的モデルは、どの社会においても、社会システムを維持するために、あるいは、成員を統制するために使われるという意味で、英雄、悪漢、阿呆は、社会統制 (social control) の3つの基本的側面を表わしているともいえる。<sup>(6)</sup>

こうして、クラブにあっては、英雄は、何よりもまず、規範 (norm) の、より良き体现者として現われる。英雄は、あるエートスの表わす主要なテーマの担い手としてとらえられるのである。

この基本的考えに従って、クラブは、英雄を5つのカテゴリーに分類し、それぞれが表わしている価値と業績のテーマとして、次のようなものをあげている。<sup>(7)</sup> (表1参照)

表 1

カテゴリー	テ ー マ
1) 勝利者 (Winners)	; 人々の得たいと思っているものを手に入れ、すべての人を打ち負かし、チャンピオンとなる。
2) 人並みすぐれた名手 (Splendid Performers)	; 観衆の前で輝き、“ヒット”をとばす。
3) 社会的受容の英雄 (Heroes of Social Acceptability)	; 誰からも好かれ、魅力的で善良。あるいは、個人的に集団に受け入れられ、帰属の喜びを集約的に示す。
4) 独立の人 (Independent Spirits)	; 孤高の、一人我が道を行く。
5) 集団への奉仕者 (Group Servants)	; 人を助け、協力し、自己犠牲的な——集団のために奉仕し、結束を高める。

いうまでもなく、これは、アメリカ社会における英雄のとらえ方の1つの例にすぎない。しかも、最もおおまかな分類の1つの試みにすぎないだろう。しかし、ここで、一応、少なくともアメリカ人の英雄像の1つの例が具体的にでてきたので、いわば、英雄研究の最終的課題を先取りするという形で、日本人の英雄像、<sup>(8)</sup> “日本的” 英雄という問題に簡単にふれておきたい。

### <日本人の英雄像>

日本における英雄、日本人の英雄像というテーマについては、歴史家や文学者によって論じられたものが多いように思われる。先に述べた第一のコンセンサスをささえてきたのが、この流れである。

その代表的な一例として、例えば、主に、大衆文学の研究を通じて、英雄像をさぐっている尾崎秀樹の議論があるが、それを手がかりとして、日本人の英雄像、“日本的” 英雄の一側面を考えてみたい。

英雄の条件として、尾崎は、次の5つをあげている。<sup>(9)</sup>

- 1) 正義派であること。
- 2) その正義をのべ行なうためには乱世でなければならない。(乱世が、英雄を生む)
- 3) 人に抜きんでている体力と知力を持っていること。(英雄としてのスタミナ)
- 4) その末路が悲劇的であること。
- 5) 生涯のうちにいくつかのナゾが含まれていること。<sup>(10)</sup>

一見して明らかなように、これは先にあげた、クラップの英雄の5つのカテゴリー、及びそれらの表わす諸テーマとは、微妙なズレを示している。そして、尾崎が、具体的に扱っているのは、いずれも日本の英雄ばかりであり、ここにあげられている条件は、実質的には、日本人の英雄像、“日本的” 英雄の条件と考えられるので、一層この点は、示唆的である。

特に、ここでは、第4の条件に注目したい。この第4の条件；その末路が、「悲劇的」であることという条件から容易に想起されるのは、いわゆる “判官

びいき”と呼ばれている日本人の心的態度である。義経伝説を作り、四十七士の物語の人気を支え、西郷隆盛を英雄としたのは、他ならぬ、この“判官びいき”<sup>(11)</sup>であった。

また、もう1つ例をあげておこなうなら、神島二郎は、日本人の英雄観にふれ、その庶民の英雄観には、次の5つの系列があることを指摘している。

- 1) 異常人崇拜(カリスマ的英雄)
- 2) 太閤崇拜
- 3) 剣の礼賛(『大菩薩峠』などの大衆文学のヒーロー)
- 4) 判官びいき
- 5) 孤独の正義派(股旅物等)<sup>(12)</sup>

ここでも、“判官びいき”は、1つの重要な系列として、とりあげられているのだが、この“判官びいき”を核として、日本人の英雄像、“日本的”英雄の重要な一側面が、明らかにされるのではないかと思われる。特に虚構化され、神格化され、伝説化された英雄の場合には、不可欠の要素であろう。(もちろん、虚構化・神格化のプロセスには、第5の条件としてあげられている「生涯にいくつかのナゾが含まれていること」が、もう1つの重要な基礎であることはいうまでもない。)

#### ＜英雄の衰退・英雄の不在＞

先に、英雄の通文化的な研究の可能性にふれ、また前項で述べたのは、その最終的課題の先取りであったわけだが、当然もう1つの可能性として、時間を軸とした比較が考えられる。英雄像の変遷を追う作業である。

これに関しては、生産の英雄から消費の英雄へ、労働の英雄から遊びの英雄へ、あるいは、英雄から有名人へというような、いくつかのキャッチフレーズ的な表現が知られているが、それらは、それなりに、大きな変化の傾向をとらえ得ているように思われる。(先にあげた、クラブの第2の類型 Splendid Performers も、マスコミ時代の新しい英雄という性格が強い。)

“現代の英雄”という問題を含む英雄像の変遷を追う作業は、興味深いテー

マであるが、ここでは、その詳細には立ち入らない。後に調査についての記述の部分で、この問題の一部にふれる予定である。

ここでは、若干異なった角度から、“英雄の今日の状況”とでもいうべき問題を、英雄の機能という問題にからめて検討しておきたい。クラップが、“英雄の衰退”(Deterioration of Heroes)として論じているのが、この問題に関連があるのだが、彼の議論に沿って要約するなら以下のようなになる。

よく統合された社会では、明確な1つの性格モデル、あるいは、相互に適合性の高い相対的に少数のモデルが人々に提供される。この人々の手本とされる性格モデルが、英雄に他ならない。——ところが、複雑化した現代社会(例えば、現代のアメリカ)の英雄というものを考えると、それは、数もかなりなものに及び、しかも、互いに一貫性のない雑多なものの寄せ集めである。

模範<sup>モデル</sup>の多様性、その選択における自由は、最高の絶対的・倫理的基準に関して、ほとんどコンセンサスがないということ——言い古された表現を用いるなら、まさに価値観の多様化状況——を意味する。そして、こうした状況は、個人のレベルでは、一方で役割選択における自由と、他方で役割葛藤・アイデンティティーの混乱を意味する。

要するに、英雄が、本来果すべき“正常な”機能を果し得なくなっている状態が、クラップの言う“英雄の衰退”ということなのだが、より深刻な問題は、次の点にある。

つまり、それは、英雄が1つのモデルとして、人々が達成しようと努力する理想を支持するという正常な機能を果さず、実は、我々の現実の世界に欠如しているものに対して、一種の代償として作用しているという事実である。例えば、同調を余儀なくされる人間が、その同調を不快と感じつつも、独立の人というようなタイプの英雄が存在することによって、自分以外の誰かが、他人とは異なる勇気を持っていることを知って、何らかの安堵感を得るといった場合や、現実の世界は、食うか食われるかの競争世界であるにもかかわらず、お人好しのタイプの人間が、賞賛すべき1つの英雄モデルとして祭り上げられる場合などが、それである。(後者は、現実の矛盾を覆い隠すために、タテマエ的

価値のシンボルとして、1つの英雄像が、かつぎ出される場合である。) いずれも、人々が、自分の努力の放棄と偽善とに、できるだけ不快を感じないようにする機能を果たすという意味で、それらは、代償作用なのである。

以上、クラブに沿って、英雄の衰退という状況を述べたわけだが、これは、同時に、“英雄不在”の状況にかかわってくる。そして、英雄不在は、“英雄待望”と常に隣り合わせだ。

価値混乱の故に、かえって人々は、純粋な価値の体現者としての英雄を求めるのである。そして、同時に、自己の“無力感”故に、彼に夢を託すのである。ここに新たな“危機”を見ることもできようが、混乱した価値の奇妙なバランスのうえに、ニセの統合が成立しているという状況が、現実の姿なのかもしれない。

### 調 査 篇

上に述べたような問題意識と、基本的枠組みにもとづいて行なっている調査の一部を、次に報告したい。

#### <目的及び課題>

調査の目的及び課題については、すでに指摘した問題点からある程度明らかではあるが、ここで、改めて、個条書きにしてあげておくと以下の通りである。

- (1) Orrin Klapp は、アメリカ人の英雄像にもとづいて、英雄のカテゴリー分けを行なっているが、日本人の場合で、それを行なうとどのような結果が得られるか。また、ひいては、そこから、“日本的”英雄像と似たものが、明らかになるか。
- (2) 英雄の属性とは何か。英雄のイメージはどんなものか。<sup>(13)</sup>
- (3) 英雄と尊敬する人との対応関係をみて、英雄が、理想的価値あるいは規範の体現者であるという基本的前提の妥当性を検討する。
- (4) 英雄とスターとの対応関係をみて、英雄から有名人へ、英雄からスターへという移行を検討し、そこから“現代の英雄”像というものが、つかめるかどうかをみる。

## &lt;方 法&gt;

- 〔1〕 調査対象；都内A大学生 86名，神奈川B大学生 91名，都内C女子高校生 91名，計 268名 内 男 100名 女 168名 実施期間 1975. 5～6
- 〔2〕 手続き；質問紙法

あらかじめ自由記述式のプリテストで得られた人物の中から，50名を<sup>(14)</sup>選んで，その各々に対して次のような質問をした。

## 《質問1》

次にあげる人物（架空の人物も含む）は，あなたにとって，英雄，悪漢，阿呆，スター，尊敬する人のどれにあたりますか？ あてはまらと思うところに○印をつけて下さい。また以上のどれにもあてはまらないと思うときには，「どれでもない」の欄に○印をつけて下さい。その人物を知らない場合には，「知らない」という欄に○印をつけて下さい。なお，2つ以上にあてはまらと思うときには，二個所以上の欄に○印をつけて下さい。

例	英 雄	悪 漢	阿 呆	ス タ ー	尊 敬 する 人	ど れ だ も な い	知 ら ない
山 田 一 郎				○			
加 藤 二 郎	○			○	○		
田 中 三 郎						○	

表 2

今回の調査で取り上げられたのは以下の50名である。

アラン・ドロン，アルセース・ルパン，アル・カポネ，アレキサンダー大王，石川五右衛門，市川房枝，イエス・キリスト，江川 卓，大石内蔵助，小沢征爾，大久保清，吉良上野介，刑事コロンボ，ケネディ大統領，こまわり君，西郷隆盛，坂本竜馬，3億円事件犯人，シーザー，シャイロック，ジャンヌ・ダルク，シュバイツァー，ショーケン(萩原健一)，貴の花，武見太郎，大宰 治，田中角栄，田沼意次，チャップリン，デヴィ夫人，徳川家康，豊臣秀吉，ナイチンゲール，長島茂雄，ナポレオン，二宮尊徳，野口英世，ビートルズ，ヒットラー，ペートーヴェン，ヘレン・ケラー，ホーチミン，朴大統領，マルクス，三島由紀夫，美空ひばり，源 義経，毛沢東，リンカーン，ルパン3世



単純集計による各々の順位（上位20名）

英 雄		悪 漢		阿 呆	
	N %		N %		N %
1.	ナポレオン 185 (69.0)	1.	大久保清 200 (74.6)	1.	大久保清 106 (39.6)
2.	アレキサンダー 160 (59.7)	2.	ヒットラー 134 (50.0)	2.	こまわり君 100 (37.3)
3.	A. ルバン 147 (54.9)	3.	A. カポネ 132 (49.3)	3.	田中角栄 97 (36.2)
4.	坂本竜馬 144 (53.7)	4.	田中角栄 94 (35.1)	4.	美空ひばり 86 (32.1)
5.	リンカーン 138 (51.5)	5.	吉良上野介 79 (29.5)	5.	三島由紀夫 71 (26.5)
6.	西郷隆盛 135 (50.4)	6.	朴大統領 70 (26.1)	6.	デヴィ夫人 70 (26.1)
7.	J. ダルク 133 (49.6)	6.	石川五右衛門 70 (26.1)	7.	ヒットラー 50 (18.7)
8.	シーザー 128 (47.8)	8.	田沼意次 69 (25.7)	8.	朴大統領 44 (16.4)
9.	ケネディ 118 (44.0)	9.	3億円犯人 54 (20.1)	9.	江川 卓 42 (15.7)
10.	ベートーヴェン 109 (40.7)	10.	徳川家康 43 (16.0)	10.	ショーケン 30 (11.2)
10.	豊臣秀吉 109 (40.7)	11.	A. ルバン 42 (15.7)	11.	吉良上野介 28 (10.4)
12.	シュバイツァー 102 (38.1)	12.	シャイロック 33 (12.3)	12.	ルバン3世 27 (10.1)
13.	徳川家康 96 (35.8)	13.	武見太郎 31 (11.6)	13.	太宰 治 25 ( 9.3)
13.	3億円犯人 96 (35.8)	14.	デヴィ夫人 24 ( 9.0)	14.	石川五右衛門 20 ( 7.5)
15.	大石内蔵助 89 (33.2)	14.	美空ひばり 24 ( 9.0)	15.	貴 の 花 19 ( 7.1)
16.	ナイチンゲール 87 (32.5)	16.	ナポレオン 23 ( 8.6)	16.	ナポレオン 17 ( 6.3)
17.	源 義経 85 (31.7)	16.	豊臣秀吉 23 ( 8.6)	17.	長島茂雄 16 ( 6.0)
18.	長島茂雄 82 (30.6)	18.	ルバン3世 21 ( 7.8)	18.	武見太郎 15 ( 5.6)
19.	毛 沢 東 80 (29.9)	19.	アレキサンダー 15 ( 5.6)	19.	シャイロック 14 ( 5.2)
19.	ルバン3世 80 (29.9)	20.	シーザー 14 ( 5.2)	19.	豊臣秀吉 14 ( 5.2)

表 3 (次ページへつづく)

TOTAL N = 268

ス タ ー			尊 敬 す る 人		
		N %			N %
1.	A・ドロン	242 (90.3)	1.	ヘレン・ケラー	155 (57.8)
2.	ショーケン	215 (80.2)	2.	野口英世	151 (56.3)
3.	ビートルズ	198 (73.9)	3.	シェパイツァー	150 (56.0)
4.	チャップリン	194 (72.4)	4.	ナイチンゲール	140 (52.2)
4.	長島茂雄	194 (72.4)	5.	二宮尊徳	106 (39.6)
6.	貴の花	176 (65.7)	6.	イエス・キリスト	66 (24.6)
7.	刑事コロンボ	173 (64.4)	7.	3億円犯人	64 (23.9)
8.	美空ひばり	130 (48.5)	8.	リンカーン	61 (22.8)
9.	ルパン3世	103 (38.4)	9.	市川房枝	60 (22.4)
10.	3億円犯人	96 (35.8)	10.	ベートーヴェン	57 (21.3)
11.	こまわり君	92 (34.3)	11.	ケネディ大統領	54 (20.1)
12.	江川 卓	86 (32.1)	12.	チャップリン	53 (19.8)
13.	デヴィ夫人	82 (30.6)	13.	マルクス	48 (17.9)
14.	三島由紀夫	63 (23.5)	13.	太宰 治	48 (17.9)
15.	小沢征爾	59 (22.0)	15.	ルパン3世	39 (14.6)
16.	石川五右衛門	35 (13.1)	16.	毛沢東	32 (11.9)
16.	ケネディ大統領	35 (13.1)	17.	ホーチミン	31 (11.6)
16.	ベートーヴェン	35 (13.1)	17.	ビートルズ	31 (11.6)
19.	源 義経	34 (12.7)	17.	J・ダルク	31 (11.6)
20.	A・ルパン	32 (11.9)	17.	A・ルパン	31 (11.6)
20.	大石内蔵之助	32 (11.9)	17.	長島茂雄	31 (11.6)

表 3 (つぎ)

Social Type としての「英雄」像

<分析・結果・考察>

I. 前記の課題(3)(4)を明らかにするために、すなわち、英雄、悪漢、阿呆、スター、尊敬する人のそれぞれの間の、おおまかな対応関係をみるために、各組合わせの順位相関を求めてみた。(表4)

表 4

P < . 01\*\*

	英雄—悪漢	英雄—阿呆	英雄—スター	英雄— 尊敬する人	悪漢—阿呆
rs	-0.239	-0.584	-0.021	0.508	0.480
t	-1.673	-4.088	-0.147	3.556**	3.360**
	悪漢—スター	悪漢— 尊敬する人	阿呆—スター	阿呆— 尊敬する人	スター— 尊敬する人
rs	-0.098	-0.641	0.272	-0.633	-0.115
t	-0.686	-4.487**	1.904	-4.431	-0.805

これを見ると、英雄—尊敬する人、悪漢—阿呆が、有意に高い相関を示し、英雄—阿呆、悪漢—尊敬する人、阿呆—尊敬する人が、有意に高い逆相関を示していることがわかる。このことから、英雄が、規範あるいは理想的価値の体現者であり、悪漢、阿呆は、ネガティブなモデルであるという基本的考えは、<sup>(15)</sup>支持されたといえよう。

また、現代の英雄像という問題との関連で、それとの対応が予想された「スター」という項目を設けてみたが、英雄—スターの間には、有意な相関は見い出せなかった。つまり、英雄から有名人へというような英雄像の変遷を測る指標として、あえて有名人ということばを使わずに、スターということばを用いたわけだが、結果は我々が、意図し、予想したようなものとはならなかった。

しかし、これは、「スター」ということば自体にも問題があったように思われる。つまり、このスターということばには、super star という積極的・肯定的の評価を含む意味と、そうではなくて、むしろしばしば逆に、否定的に、単なる芸能人とか、芸能人的(タレント)という意味の2つの異質の要素が含まれてしまっているようである。さらに、「スター」は、famous も notorious

も含み得るのである。このようなわけで、我々はあくまでも前者の意味を「スター」ということばに込めて使用したのだが、被験者の反応は、必ずしもそれに一致しなかったように思われる。以上のような要因もあり、英雄—スターの間の相関は、うまく出て来なかったのであるが、自由記述させた場合は、英雄として出て来た同一人物が、「スター」という項目があると圧倒的にそこに評価されてしまうことなどを考慮すると、必ずしも、英雄からスターへという仮説が否定されたともいえないように思われる。

Ⅱ. 課題(1)に対する1つの方法として、英雄として選ばれた上位20名を選んで、数量化Ⅲ類による分析を試みた。(結果は、図1参照。なお、説明の便宜上、図に破線をほどこした。)

I軸は、一般的な英雄の軸、いわゆる英雄の軸と考えられる。Ⅱ軸によって、英雄が、ほぼ4つのグループにカテゴリー分けされるように思われる。以下は、その1つの解釈の試みである。

### 〔1〕 <怪盗>型

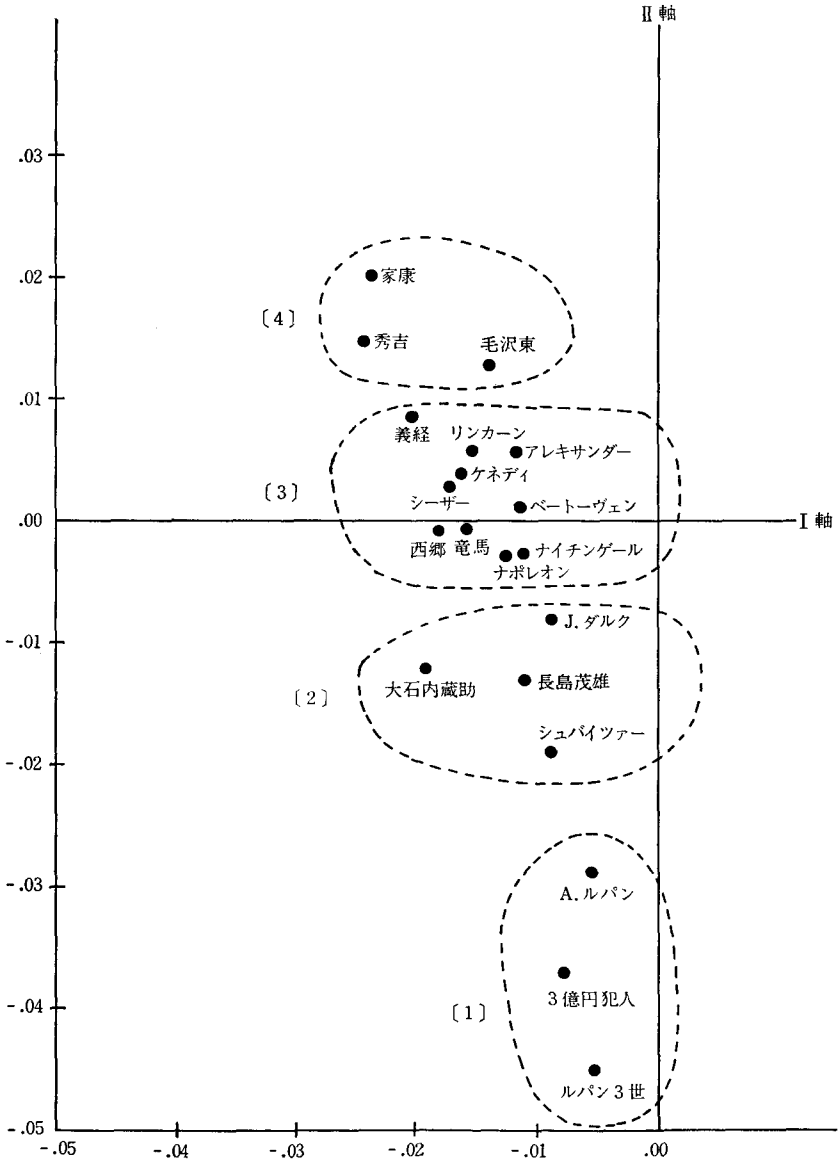
第1のグループは、一応<怪盗>型と名づけてみた。アルセーヌ・ルパン、3億円事件犯人、ルパン3世のグループは、明瞭な共通点を持っており解釈は容易である。いずれも<盗人>の類なのだが、そこには、犯罪や悪のもつ現実の生々しさ、あくどさがなく、それらは抽象化され昇華されてしまっている。そこに、一種のカッコよさだけが残った、いわば“英雄化した悪漢”である。<sup>(16)</sup>

### 〔2〕 <殉教>型

ジャンヌ・ダルク、シュバイツァー、大石内蔵助、長島茂雄——このグループは、一見統一を欠き、解釈は困難であるが、いずれも自覚した使命に殉じた人間であるということがいえるかもしれない。<殉教者>というのは、クラブの分類でも Group Servants 中の重要なサブ・カテゴリーの1つになっている。<sup>(17)</sup> 彼らは、何よりも loyalty を象徴しているものだというのである。ちなみに、クラブによってあげられている具体例は、ジャンヌ・ダルク、イエス、ガンジー、サッコ&ヴァンゼッチ等である。

### 〔3〕 <非命>型(悲劇の英雄)

図 1



最も多くの人間が、このグループに集中しており、英雄のいわばステレオ・タイプを表わすようなグループだともいえよう。ベートーヴェン、ナイチンゲールを除けば、いずれも、天下、国家——広い意味での政治を舞台として活躍した英雄だといってよい。その時代により、征服者・征服の英雄と、すぐれた政治家という2群に分かれるといってもいいかもしれない。いずれも、非命の死を遂げているという点で共通し、その意味では、“悲劇の英雄”でもある。

#### 〔4〕 <天下人>型（成功者型）

そのプロセスに違いはあれ、最終的には、権力を手中におさめ、相対的に、安定した支配の時代を築いた<成功者>のグループだとしておこう。また同時に、彼らは、指導者としての英雄であるといってもよい。“乱世の英雄”が、“統治の英雄”にまでなり得た数少ない例だといっていいだろう。

#### <まとめ>

以上は、簡単な調査の、しかも、そのごく一部の分析結果にすぎない。これから言えたことは、それほど多くない。しかし、基本的な前提が、ひとまず支持されたこと、クラップの英雄のカテゴリー分けとは違う、具体的な英雄のカテゴリー分け（それは、一部が、一致し、一部が異なるという意味で、きわめてノーマルな結果である）が、得られたということは、一応の成果であったといっていいたいだろう。

英雄像の変遷や、現代の英雄像、あるいは、“日本的”英雄像という問題（これだけの少数のサンプルから“日本人”云々や、“日本的”云々は、一般化できないのは当然であるが）、さらには、例の“判官びいき”の問題とのかかわりは、必ずしもうまく出てきたとはいえない。いずれも、今後の課題として、よりキメ細かな、多面的な検討がなされなければならないだろう。

#### <付 記>

本稿は、「“英雄”の社会心理学的研究」として、第16回日本社会心理学会（1975. 9）で発表したものに、加筆・修正をほどこしたものである。

なお、データ処理にあたっては、一橋大学 F A C O M 230—25 システムを使用した。分析にあたっては、一橋大学大学院（現ワシントン大学大学院）山岸俊男氏の全面的協力を得た。また計算機室の方々にお世話になった。記して感謝の意を表したい。さらに、本研究のきっかけを与えてくれた真田孝昭氏、ならびに調査の際にお世話になった、折橋徹彦、内田伸子、樋野芳雄の各氏に感謝したい。

<注>

- (1) カーライル (1841)
- (2) ブーアスチン (1962) 邦訳59—64頁。及び288頁参照。
- (3) いうまでもないことだが、英雄研究といっても、英雄そのものに興味があるわけではない。英雄というものが、人々にとって何であるかということが問題なのである。それが、英雄の社会学的あるいは、社会心理学的研究という意味である。『英雄』は、あくまで1つの手がかりにすぎない。なお、こうした観点からの英雄研究には、自己イメージ、アイデンティティー等のかかわりで、個人的レベルに焦点をおいたより心理学的な研究と、いわゆる集合表象的なものとして英雄像をとらえるより社会学的なものとの、2つの流れが区別できよう。
- (4) 彼には、他にも、参考文献であげたような英雄等についての論文が、いくつかあるが、それらは、この著作の中に、ほぼ統合されているので、ここでは、主に本書での議論に依拠する。
- (5) 社会的タイプ (social type) というのは、クラブ独自の概念といってもいいだろう。彼によるとそれは、次のようなものである。「ある特定の集団によって形成され、使用される役割行動の集合的規範 (collective norm) : 人がいかにあるべきか、あるいは、いかに行動すべきものと期待されているかについての理想化された概念」(p.11)
- (6) 英雄は、賞賛され、模範として積極的・肯定的に選ばとられ、模倣しようとする。一方、悪漢、阿呆は、共にネガティブなモデルとして、前者は、その悪が恐れられ、嫌われ、後者は、その愚かさが、あざけりの対象とされるからである。クラブは、このように、英雄、悪漢、阿呆を1つのセットとして扱っている。本稿では、このうち英雄に、主に焦点をあわせているが、同時に、悪漢、阿呆に対する考慮が常に払われていることはいうまでもない。調査に関しても同様である。
- (7) このうち、さらに、1) Winners は、strong man, brain, smart operator, great lover, 3) Heroes of Social Acceptability は、pin-ups, charmers, good fellows, conformers (moralists, smothies) 5) Group Servants は、

- defenders, crusaders, martyrs, benefactors のサブカテゴリーをそれぞれ含んでいる。
- (8) 日本で英雄を問題にした場合、クラップの分類が、果してうまくあてはまるかという素朴な疑問との関連で、筆者にとってポイントだと思われる問題点を指摘するにとどめる。
- (9) 尾崎秀樹(1968) 6頁。
- (10) このうち 2) は、英雄の属性というよりも外的条件について述べたものなので、他の4つとは異質のものである。
- (11) こうした問題を扱ったポピュラーなものに、佐藤忠男(1958)、高橋富雄(1966)、和歌森太郎(1966)、河原宏(1971)等がある。
- (12) 神島二郎(1961) 83頁。
- (13) これに関しては、同じ調査の中で、S-D法による質問を行なっているが、これの結果についての報告は、本稿では省略する。
- (14) 選ばれた50名及び、各々の単純集計による順位(上位20名)については、それぞれ、表2、表3を参照されたい。
- (15) もっとも、クラップの図式を機械的にあてはめれば、英雄—悪漢の間に有意の逆相関が得られなかったことは、問題とすべきかもしれない。しかし、これは、悪漢というもの持つ特殊性を考慮に入れなければならないだろう。英雄像とともに、悪漢像、悪人観のより精密な検討が必要だろう。
- (16) この「悪漢は、英雄になり得る」という点は、先に述べた、英雄—悪漢の関係を検討する際の1つのカギになると思われる。前注(15)参照。
- (17) 注(7)参照。

<引用及び主要参考文献>

- Benson, L. (1974) *Images, Heroes, and Self-perceptions : the search for identity—from mask-wearing to authenticity*, Prentice-Hall Inc.
- Boorstin, B. J. (1962) *The Image : or What Happened to the American Dream*, Weidenfeld & Nicolson (星野郁美, 後藤和彦訳(1964)『幻影の時代』東京創元社)。
- Campbell, J. (1949) *The Hero with a Thousand Faces* (Meridian Edition 1956)
- Carlyle, T. (1841) *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in the History* (入江勇起男訳(1962)『英雄と英雄崇拜』カーライル選集Ⅱ日本教文社)
- 神島二郎(1961)『近代日本の精神構造』岩波書店
- 唐沢富太郎(1964)『理想の人間像』中央公論社
- 河原 宏(1971)『西郷伝説』講談社
- Klapp, O. E. (1948) "The Concept of Popular Heroes", *A J S* Vol. 54
- (1949) "The Fool as a Social Type", *A J S* Vol. 55



一 橋 研 究 第 30 号

- (1956) “American Villian-Types”, *A S R* Vol. 21  
————— (1958) “Social Type : Process and Structure”, *A S R* Vol. 23  
————— (1960) *Collective Search for Identity*, Holt, Rinhart & Winston Inc.  
————— (1962) *Heroes, Villians and Fools*, Prentice-Hall Inc.  
————— (1964) *Symbolic Leaders : Public Dramas and Public Men*, Aldine Publishing Co.

Lowenthal, L.(1944) Biograhies in Popular Magazine, in Lazarsfeld, P. F.& Stanson, F (eds.) *Radio Research* 1942—43

尾崎秀樹 (1966) 『英雄・その歴史の謎』三一書房

————— (1968) 『英雄伝説』徳間書店

佐藤忠男 (1958) 『裸の日本人』光文社

数理統計研究所 (1961) 『日本人の国民性』至誠堂

————— (1970) 『第2日本人の国民性』至誠堂

高島素之 (1930) 『英雄崇拜と看板心理』忠誠堂

高橋富雄 (1966) 『義経伝説』中央公論社

鶴見祐輔 (1951) 『新英雄待望論』太平洋出版社

和歌森太郎 (1966) 『義経と日本人』講談社

————— (1972) 『日本史の虚像と実像』毎日新聞社

(筆者の住所：国立市東2-4 院生寮)